

古高取通信

令和元年8月

私たちは、活動の四本柱を基に、まちづくりに貢献することを目指します。

1. 活動の拠点を創る
2. 古高取の知識を深める
3. 古高取の魅力を伝える
4. 次世代へつなげる

古高取を伝える会会報



目次	
2019年度定期総会	2
年間スケジュール	5
活動の記録	6
なんでも掲示板	8
古高取紹介	9

資料館を待望する(2)

「人材のいないまちに未来は在るだろうか。小手先の関係人口拡大策の前に、住んでいる人たちがいきいきと暮らすまちづくりに本気で挑むこと、豊かで開かれた関わりのデザインにすることが地域の持続可能性を担保する基盤なのだ」
福津市副市長の松田さんが西日本新聞の堤論で述べられた一文だ。

どのまちにも、まちの歴史があり、まちを愛し、まちを誇りに思う人たちがたくさんいる。だが、その思いを行政は受け止めてくれない。

私たちが行政に求めすぎているかもしれない。「やねだん」のように、行政に頼らないまちづくりの成功例はある。

しかし、官と民が、互いを信頼し手を取り合って住みよいまちづくりに努力していくことが、町を変えていくだろう。

ついでに棲家のまちを少しでも輝くまちにし、次世代に引き継ぐのが私たちの務めではないかと想う。

隅田 知明

2019年度定期総会

とき…令和元年五月二十三日(木)
場所…直方市中央公民館

二階第一学習室

記念講演…上野焼 宗家 渡仁氏

「上野焼の歴史とその背景」

2019年度の定期総会は、活動報告・決算報告・活動計画(案)・予算(案)について滞りなく承認いただきました。

そして、これからの十年の中心課題として次の三つをあげました。

- (1) 高取焼資料館の建設の促進
- (2) 登り窯の復元と、都市部で焼けなくなった窯元と連携した陶芸祭の開催



(3) 福智山ダムに沈んだ内ヶ磯窯跡の地中遺構の可視化
他団体との連携を深めながら、実現に向けた取り組みを強化していきます。

さらに、直方市民がまちの歴史を知り、誇りに思う、まちづくりの一面を担っていきます。

大塚直方市長の来賓あいさつ

理事 副島 邦弘

令和元年「古高取を伝える会」定期総会の来賓として直方市の新市長に選ばれた直方市長大塚進弘氏に挨拶をいただいた。

挨拶の骨子は次のとおりである。
・市長の自己紹介後「古高取を伝える会」が直方市に対する援助や協力に感謝意を述べられている。その中でも市内の小学六年生の陶芸教室に対する尽力と古高取の伝統づくり次世代に教え継承することにお礼申し上げます。

・私も焼物屋さんとの関わりは、元川原市長時代に物産振興会を組織し、その担当者として携わり先代の清水筑山さんを会長として活動し、吉田さん、宮原さん等の窯



渡仁氏をお迎えして

理事 副島 邦弘

令和元年度総会の記念講演として、演題は『上野焼の歴史とその背景』をパワーポイントを使用しながら映像を持って話された。

その内容は三点に絞られている。それは、

- (1) 上野焼の現状を中心に
- (2) 割山椒の向付について
- (3) 上野の隠れキリシタン伝説であった。

では、各項の話されたことをまとめてみる。

(1) 上野焼の現状を中心に
上野焼の発祥地は釜ノ口窯で、それに並行して岩屋高麗窯ある。江戸前期の豊前小倉藩の藩窯で、いわゆる遠州七窯の一つで、細川忠興(三斎)が関ヶ原の戦いの功によって、黒田家が筑前国に移封し、その後に丹波の宮津から中津に移り豊前国一国三十九万石の領主になり二年後に小倉に本城を移動し豊前小倉藩と称したのは、慶長七年(1602)であった。肥前の唐津領内にいた朝鮮人の陶工尊楷(のち上野喜蔵高国と改名)等を招き、上野村に陶窯を築いて焼

かせたのが始まりと伝えられる。「上野焼の由来書」・「上野焼の沿革」の私家文書では、尊楷は朝鮮釜山城主の尊益の子であるとされているが明確に位置付ける資料ではない。ただ李氏朝鮮時代の陶工は非常に低い身分にあり、城主の手柄にある者が製陶に携わるだろうか。疑問である。上野には釜ノ口窯、岩屋高麗窯、皿山本窯等の古窯があるが窯跡や出土資料から推測して、前二者が江戸初期の慶長（元和年間（1596～1624））に活動した窯であり、そのうちの釜ノ口窯は忠興の子忠利が寛永九年（1632）に肥後に転封にな



るに伴って開窯したと考えられる。皿山本窯は、それらにやや後れて寛永年間に始まり明治中期まで活動したと推定される。しかし正確な開始期や閉窯期は必ずしも明らかではない。尊楷と長男忠兵衛、次男藤四郎は忠興に従って、肥後の八代郡奈良木村に移り八代焼を始めた。一方、上野には三男十時孫左衛門と娘婿の渡久左衛門が残り、次の藩主となった小笠原家に仕えて幕末まで活動を続けた。昭和三十年に発掘調査された釜ノ口窯跡の再発掘調査をやりみたい。（図1）



図1 上野釜ノ口窯跡全景
（『豊前小倉藩窯 上野焼展 図録』より）



図2 四方耳付水指
銘 若葉雨
（田中丸コレクション）

上野のやきもの屋も現在二十軒と増えているが、陶工の老齢化が進んでいることが今後心配である。上野焼のやきものは薄づくりで、重量は軽く作りがシャープである。その中でも割山椒の向付について中心に述べてみたい。

（2）割山椒の向付について

古上野と古高取とは、同じ福智山麓に窯の位置が接近する。筑前と豊前の国境に位置し、高取焼の職人と上野焼の職人の交流はあったものと考えられる。その中でも（図2）の四方耳付水指銘若葉雨は、上野釜ノ口窯から高取の内ヶ磯窯に窯籍が変更された。成形は紐作

りののちロクロにのせて伸ばし、内側から指で四隅を押し出し両手で四方形に整えている。全体に藁釉をかけ、その上に緑釉をイッチンがけし、さらにもう一度口縁から緑釉の上に胴三分の一あたりまで藁釉をかけている。この技法は（図3）円波四方水指に共通点が多い。丹後の陶工源七が三斎を慕って元和七年（1621）に豊前入りしたと伝えるように、光秀と細川家との関係から丹波焼にも三斎が興味を持っていたことは十分に考察される。陶工の移動こそが技術の移転である。

割山椒向付とは、口縁が外に向かって緩く開き、その口縁から胴に向かって三方から深くV字状に切り込んだ形の器で、高台に割高台のものもある。形状が山椒の実がはげたようであるところからの名称になっている食器として向付に特に多くみられ、鉢等にもある。唐津・上野・萩等で作られている。（図4）

『三斎公伝書』（茶道四祖伝書）によると、寛永十七年（1640）卯月十七日（四月十七日）、「コクラ焼皿」、「コクラヤキトモブタ水サシ」、「肥後焼の茶碗」、その他の道具立てで三斎が京都で茶会を開いた模様が記録されている。招かれた松屋久重は茶になった時風炉と水指・茶入・茶碗の図を入れていた。その水指の絵の上に「コクラヤキトモブタ水サシ」と瓢形の水指の絵を記録している。また「コクラ焼皿」は、今日言う所の割山椒向付であった。（図5）

割山椒向付は、福岡市美術館の松永コレクション・藤田美術館・出光美術館・田中丸コレクション・畠山美術館等で所蔵されている。上野焼の売立では、窯変天目茶碗で昭和四年に二万六千九百九十八円であったという。この当時は、千円で一軒の家が建っていたという。本題とはがらりと話しが変わ

りますけど、隠れキリシタン伝説をお話ししましょう。

(3) 上野の隠れキリシタン伝説
永青文庫の細川忠興関係の古文書の中にブドウ酒を造ったことが残っている。十七世紀の初めのものでカトリック教会ではミサ後、聖杯授与が行われる。神父が「ジーザズボデイ」と言いながら手ずから信者の口にひと切れのパンを運んでいる。その後からワインを入れた黄金の聖杯を持った神父が「ジーザズブラッド」と言いながら一口ずつ飲ませて回る。こ



図3 丹波 四方水指
(17世紀初 丹波古陶館蔵)



図4 割山椒形向付 五客
(田中丸コレクション)

れはイエス・キリストの体に見立てたワインを口にすることで、信仰的なつながりを強めるための儀式である。

細川家のキリシタンは、藤孝(幽斎)の妻鹿射香、忠興(三斎)の妻ガラシャ(玉子)がそれである。家臣も多くキリスト教に帰依している。ブドウ酒は日本では十五世紀、中国から僧侶により本草書等と共にもたらされ、享徳三年(1454)の辞書『撮壤集』の「ブドウ酒」が初見とされ、ワインでは無花果実酒の類とされている。ワインは、明治七年(1874) 甲州ブドウを使用し白・赤ワインを作った。忠興が作ったのも果実酒であった。慶長十七年(1612)、幕府は禁教令を出し、翌年全国に布告し、高山右近等(注6)をルソンに追放し、秀忠・家光が強化し大弾圧し、島原の乱(1637~1638)、そして鎖国完成(1639)以後踏絵の制・禁書・宗門改め・寺請制度等が完成され、キリスト教の信仰は絶滅に瀕したが、一部隠れキリシタン・離れキリシタンとして明治六年(1873)信仰の自由によって解放されたわけで、細川領の当時のキリシタンは、禁教令以後、鉾山や焼きものカマに隠れるわけである。この上野地区



図5 寛永17年4月17日朝
細川三斎の茶会で松屋久重
が描いた絵



図6 叩き文水指 釜ノ口窯
(田中丸コレクション)

にも釜ノ口の上部の福智山に鉾山(間分)が営まれていた。地名にも伝承が残り、文政十一年(1828)に香春でも宗門改で隠れキリシタンが見つかつたという。初期の上野焼にはキリスト教の宗教道具に使用されたと推察される。(図6)叩き文水指で南蛮文化館蔵のものがこれである。胴をめぐる十字内に襷(たすき)を加えた叩き文様は、うすい釉をかけた焼締調の施釉法も同じである。南蛮手の呼ばれ焼締で、口縁の部分は上から下に一度掛け、さらに胴は底下から逆に上に向け

て釉掛けした藁白釉が豪快であり、この様な器形は上野焼の初期より末期まで続いている。三斎好みの水指である。

これらの焼締の蓋付きの火消壺を経消し壺にすることは可能であるので、焼締のものがキリシタン遺物であったと考えても良いのではないかと結ばれている。

(注1) 遠州七窯の一つにあげられているが、この呼称は嘉永七年(1854)に京都の道具商梅軒田内来三郎の「陶器考」の中からである。

(注2) 昭和三十年に三上次男博士を団長として佐藤進三・曾野寿彦等が日本陶芸協会が格として発掘調査が実施された。図1は、完掘された全景写真である。

(注3) 豊前小倉藩窯上野焼展図録福智町長のあいさつの中にある。

(注4) 「三斎公伝書」に寛永十七年辰年卯月十七日の朝、夜明二吉田ノ御広間(京の細川館)へ辻閑齋と松屋久重と兩人相詰めて三斎が亭主で行った。

(注5) 玉屋デパートのオーナーで、デパート閉店後コレクションは福岡市美術館に寄託されている。

(注6) キリシタン大名の中で、中心者で高橋の大名で秀吉の禁教令の時領地没収され、前田利家に預けられた。この時、前田利家もキリシタン大名であった。高山右近は、キリシタン大名のゴード・ファザーであった。

※録音テープをもとにおこしたもので、基本的には文意の入替があるが話されたことをまとめてみた。文責は副島にある。

令和元年（2019年）年間スケジュール

月	日	曜日	事業内容	備考
4	1 28	月 日	第1回 理事会 高取焼大茶会焼物教室	えみくる 古町商店街
5	7 23	火 木	第2回 理事会 臨時理事会 定期総会・記念講演「上野焼の歴史とその背景」	えみくる えみくる 中央公民館
6	2 3 15 16 17 21 23 28 29	日 月 土 日 月 金 日 金 土	焼物教室(鞍手幼稚園) 第3回 理事会 焼物教室(直方東小学校) " (直方北小学校) " (感田小学校) " (中泉小学校) " (上頓野小学校) " (福地小学校) " (直方西小学校)	えみくる
7	1 5 16 19	月 金 日 土	第4回 理事会 高取焼通信30号発行 焼物教室(直方南小学校) " (植木小学校) 第1回 高取焼基礎研修講座「高取焼創業の謎」	えみくる えみくる
8	5	月	ほっぷすてっぷキャンプ焼物教室 第5回 理事会	中央公民館 えみくる
9	2 14 25	月 土 水	第6回 理事会 第2回 高取焼基礎研修講座「渡り陶工 高原五郎七について」 焼物教室(新入小学校)	えみくる えみくる
10	7 11 19	月 金 土	第7回理事会 焼物教室(下境小学校) 第3回 高取焼基礎研修講座「高取焼陶工 井土新九郎について」	えみくる えみくる
11	4 30	月 土	第8回理事会 高取焼基礎研修講座(まとめ講演)「小代焼について」	えみくる 中央公民館
12	2	月	第9回理事会 高取焼通信30号発行	えみくる
1	6	月	第10回理事会	えみくる
2	3	月	第11回理事会	えみくる
3	2	月	第12回理事会 高取焼基礎研修講座(窯元巡り)「有田地区」	えみくる

活動の記録

●小代焼窯跡見学バスツアー

(高取焼基礎研修講座)

〈平成三十一年三月二十八日(木)〉

場所：小代焼窯元(熊本県荒尾市)

小代焼は、寛永九年(1632)豊前から転封された細川忠利が陶工の牝小路家初代源七・葛城家初代八左衛門を従え、藩主の命によって焼かれたのが始まりということです。

最初に古小代の里公園へ行きました。江戸後期(1836年)に作



られた「小代瀬上窯跡」は傾斜地に九室の連房登窯があり、すぐ近くには水漉し場跡や実際にろくろを回していた跡が残っていました。このような跡は初めて見たので感動しました。後で調べなおすと付属の作業場跡まではつきり確認できるのは、全国的にも珍しく、近世窯業史上では貴重な遺跡だと書かれています。

「瀬上窯跡」から少し坂を上ると「小代瓶焼窯跡」がありました。連房式登窯で、古い登り窯を壊して窯を作って焼き物を焼いていたようだと話をされました。

午後は、小岱山の麓にある小代焼ふもと窯に行きました。窯元の当主 井上泰秋さんから窯の説明を受け、作品や展示室などをゆっくり見学しました。

広い庭には、庭石に坂村真民さんの「念ずれば花ひらく」の大きな句碑が。パワースポットらしいです。

最後に小代焼は、高取焼と深い関連があり、そのテーマで今年度の研修講座が聴けるそうでも楽しみます。特に十月十九日(土)の井上泰秋熊本民芸館館長の講話「小代焼と高取焼について」は、興味深いものになりそうです。

倉田豊子

●ちくぜんのおがた高取焼大茶会

(地域対象焼物教室)

〈平成三十一年四月二十八日(日)〉

場所：古町商店街・明治町商店街

今年も「ちくぜんのおがた高取焼大茶会」が開催され、私達もパネル展示、出土品展示、陶芸体験教室を実施しました。

陶芸体験で製作した作品は七月初めに完成し、田中お茶屋(明治町商店街)に展示、お渡しをお願い致しました。花瓶や皿などあり、とてもよく仕上がっていました。

三年続けて体験した子供もいて、また来年も楽しみです。

末松登志子



●鞍手幼稚園焼物教室

(地域対象焼物教室)

〈令和元年六月二日(日)〉

場所：鞍手幼稚園

今年も鞍手幼稚園で焼物教室を実施しました。子供達の素敵な作品は七月初めに出来上がり、無事お渡しすることが出来ました。

来年二月には、お茶会も実施される予定です。5年間続いている行事です。とても有り難いことです。

●子供焼物教室（焼物部会）

〈令和元年六月～七月〉
場所…直方市内の小学校

本年度も、市内の小学六年生を対象にした焼物教室が始まっています。前期は八校で実施しました。

「第一回」

〈令和元年六月十六日（日）〉
場所…直方北小学校

「第二回」

〈令和元年六月十七日（月）〉
場所…感田小学校

「第三回」

〈令和元年六月二十一日（金）〉
場所…中泉小学校



「第四回」

〈令和元年六月二十三日（日）〉
場所…上頓野小学校



「第五回」

〈令和元年六月二十八日（金）〉
場所…福地小学校



「第六回」

〈令和元年六月二十九日（土）〉
場所…直方西小学校



「第七回」

〈令和元年七月五日（金）〉
場所…直方南小学校



「第八回」

〈令和元年七月十六日（日）〉
場所…植木小学校

※六月十五日（土）に実施予定の直方東小学校は、天候不良のため中止になりました。二学期に行う予定です。

●高取焼基礎研修講座（学習部会）

〈令和元年七月～十一月〉
場所…えみくる・中央公民館

本年度の高取焼基礎研修講座（全四回）が七月から始まっています。途中からでも参加できます。十一月には、小代焼ふもと窯元の井上春秋氏を講師に迎え「小代焼について」のテーマでまとめ講演も予定しています。皆様のご参加をお待ちしております。

※今後の開催日は、年間スケジュールでご確認ください。



なんでも掲示板

●お茶会をお手伝いして十年

マイ茶碗でのお茶会をお手伝いして十年。毎年焼き上がりを楽しみで、美しく釉葉がかかり姿のユニークな物もあり、さまざまな個性豊かなマイ茶碗で抹茶をいただく子供達。

笑顔あり、”にがい”と言いなから飲み干し”おいしかった”とニコ。

毎年、茶道を通して自らの手で造った茶碗を使って、おもてなしをする作法を体験。歴史を学び、日本の伝統文化を受け継ぐ大切さ



を感じてくれていると思います。

お茶を感謝して頂く作法、お菓子をいただく時、お友達に”お先に”そして”どうぞ”と言葉を交わす何気ないやり取りの中に思いやりの学びがあります。茶会風景が想い出の一ページになることを願っています。

これからも古高取を伝える会の焼物教室の事業が続くことを願い、十一年目に向けて参加出来るように頑張りたいと思います。

一期一会の出会いを大切に子供達の笑顔に感謝感謝です。

田中紀子

※今年二月、西日本新聞に感田小学校で実施したお茶会の記事が掲載されました。

●金剛山もとり保全協議会

(令和元年、記念すべき「あじさい園」)

〈令和元年六月八日(土)〉

三十日(日)〈

場所：金剛山もとり広場

今年の「あじさい園」は、期間中27000超(車5500台以上)の人で里山があふれかえっていました。



スタッフはヘトヘト状態でしたが、終わりが始まりで七月二十日(土)に花摘み作業を行い来年に備えました。

自然相手だからでしょうか、不思議とまたエネルギーが湧いてきています。

古高取を伝える会のメンバーにもお手伝いしていただきました。

本年は夏・秋とも「ちよつくらふれ旅」には参加致しません。秋九月末頃、栗拾いの企画をする予定にしています。

末松登志子

●高取焼抹茶茶盃

「高取春慶」「亀井久彰」展示会

〈令和元年七月二十日(土)〉

二十一日(日)〈

場所：聖福寺仏殿

(福岡市博多区御供所町六の二)

今年の春より、お茶の発祥で「榮西」の開山の日本最初の禅寺で

ある聖福寺の細川白峰老大師と高取焼の次世代を継承する二人の青年達とコラボで茶盃を造っていたものが出来上がりました。この度、聖福寺仏殿で丈六の三世佛の前で展示会をさせて頂きましたので、ご報告させて頂きます。

二人の青年は、小石原鼓の「高取焼宗家」の高取春慶(十三代高取八山氏の子息)と福岡市の「高取焼本家味楽窯」の亀井久彰(十五代亀井味楽氏の子息)で、二人が作陶した茶盃に細川白峰老大師が書きつけを行い高取釉を施釉し、焼き上げました。

一つ一つの茶盃に老師が「銘」をつけ箱書きをして頂きました。

高取焼味楽窯保存会 山諸賢造



古高取紹介

内ヶ磯窯製品の

原材料粘土について

副島邦弘

古高取内ヶ磯窯出土製品の胎土（粘土）について分類してみると、その基礎になったのは窯跡の下の水田面の調査によって検出された工房跡遺構の粘土溜の粘土が水田一枚一枚の各区より発掘されていった。

陶片は器種やその成形の相違によって、胎土を異にしている。分類すると内ヶ磯窯の製品の胎土は次の五種類分けられる。

- ① 水引き用で水簸した極めてきめ細かい鉄分の少なく土で、釉薬の持ち味を出しやすく焼き上がる磁器のようになるもので、茶入・総掛けの茶道具類・鉄絵鉢・呉須絵付などに使用されている。
- ② 水引き用で微砂粒を含み鉄砂粒を含まない胎土で焼き上がると白灰色になる。平皿・足付平皿・彫皿・碗・香炉などに使われている。



- ③ 水引き用で微鉄砂粒・微砂粒を多く含む。水指・壺・結文鉢・瓢箪形鉢・木葉形皿・小型瓶・片口・扶茶碗などに使われている。
- ④ 水引きおよび輪積・タタキ成形用で細砂粒を多く含む、細鉄砂粒も含む土である。小皿・碗・甕・鉢・舟徳利・水指などに使われている。
- ⑤ 水引きおよび輪積タタキ成形用で細鉄砂粒・粗砂粒を含むものもある。鉢・甕・壺・片口・播鉢などに使われている。播鉢・片口などは焼き上がりが赤褐色あるいは焦茶色であるが、決して鉄分が多いとは思えず焼き方によるものと考えられる。

【分析】

①～③は茶道具・茶懐石などに用いられている。

④～⑤は一部のタタキの上手物を除いて、ほとんどが雑器などに用いられている。

窯の周辺の粘土は白色で細鉄砂粒・細砂粒を多く含む、焼成すると収縮率が大きかった。④～⑤程度の土である。出土した位置から考えて窯積み時の日用に使用する粘土であろう。一方、粘土溜の粘土は白色で細鉄砂粒・細砂粒を含む、粘り気があり可塑性に富むものであった。④程度の土であろう。

以上、内ヶ磯窯出土の陶片と粘土について記したが、まとめると、内ヶ磯窯の粘土は白色で、鉄砂粒・砂粒を多く含む鉄分の少ない原土を五段階程度に精製あるいは選別して単味で使用したと思われる。この粘土は可塑性・耐火度に富む性質があるわけである。

ではその製品の破片を見てみたい。それでは、鉄絵の破片の例をとってみる。

写真は直方市教育委員会の調査の分で調査報告書をとって見た。鉄絵の破片は量的には少数である。器種は碗・鉢の他にもあるが細片のため詳細不明。

(1)は器種は不明だが馬上杯の様相であろう。台部と脚部の破片で、その内底面に木枝状の文様を描く、台脚径6.5cm、高さ3.5cm。釉は土灰で、台脚内側にも施釉。青磁色に発色し、細かい貫入が入る。胎土は砂粒少なく精良。九室西側二層から出土。

(2)は平たい方形形状の鉢破片。鉢の内面に瓦生の葉と花の一部を描く。内面はやや湾曲し、縁はやや外方へ2cmほど立ち上がる。底部は若干上げ底でナデ調整。釉は長石釉で未発色か。底部には施釉されない。砂粒多く、底は暗茶褐色。前庭部二層出土している。

この他、幅太な直線文、同心円文等がある。

次の号には、福岡県教育委員会が平成七年から実施され、平成十一年に終了した調査から検出された鉄絵の製品や陶片について記述することにする。

感田小学校の六年生から子供焼物教室（お茶会）の感想文をいただきましたので、次頁に少しだけ紹介させていただきます。

古高取を伝える会の友へ



昔から親しまれていた茶道の作法を知り、日本に昔からあったことを今に伝えることは大切なことなのだと思いました。「昔は一部の人しか飲めなかった抹茶が今ではみんなが飲めるようになった。」という話を聞いて、昔の良いところを伝えることがどれだけ素晴らしいことが分かりました。茶せんを使ってお茶をたてているときに、「底を茶せんであてない」というアドバイスももらって上手にできたので、うれしかったです。これからも、さまざまな小学校に伝統文化を伝えていってほしいです。



長叫 武留 より

感田小学校

お茶会を教えたみなさんへ



私はあまりお茶会を知らなかったけれど、みなさんが教えてくれてお茶会の楽しさを知り、お茶がおいしくて、日本の文化についてもよく知れました。たくさんのおかしや道具を用意してもらって、よりお茶を楽しめました。お礼のしかたやとぎ方までくわしく教えてくれて、みなさんがいっただようで心がほっこりしてとても気持ちよかったです。このお茶会でしったれいぎやおもてなしの心を知り、私は中学になったら相手に私が感じたような心になってほしいなと思つたので、またお茶会をやりたいなと思いました。



6-3 貞野こはる より

感田小学校

上頓野公民館だより(七月号)に掲載されました

六月二十三日(日)に上頓野小学校で開催した焼物教室が、”上頓野小学校と地域とのふれあい授業”として上頓野公民館だより(七月号)に掲載されました。来年三月には、出来上がったマイ茶碗を使って卒業前のお茶会も行われるそうです。

事務局交代のお知らせ

今年度より事務局を担当します永富セツ子です。二回目の担当になります。

「古高取を伝える会」を設立して十年がたち、私達の活動がまちづくりに十分貢献してきたことに一同誇りに思っております。

また新たにこの先活動しつづけていくために事務局の役割を果たして行こうと思っております。

頑張りますので、よろしくお願い致します。

編集後記

元号が「令和」に改められました。「平成」に設立された会も十一年目を迎え、新たな課題をあげてスタートしています。

会報は、昨年から年二回の発行になりましたが、ホームページも活用しながら少しでも会の活動を皆さんに伝えて行きたいと思つています。そして、これからの会の活動がより地域に貢献できるように私も努力したいと思つています。微力ではありますが、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

「古高取通信」会報・NO 30

発行

古高取を伝える会

発行日

令和元年八月五日

現在の会員数

正会員 五十四名(五十四日)

賛助会員 十八名(二十七日)

団体 一団体(二日)

マイ茶碗の数

七千九百八十三個

事務局

〒八二二一〇〇二六

福岡県直方市津田町七十四

TEL 〇九四九(三三)一三二一